

## 人間の物質的生活を考える ——若きヘーゲルと近代の生産者たち

**Penser la vie matérielle des hommes – le jeune Hegel et les producteurs modernes**

ジル・カンパニョロ\* 高橋 克也 訳\*\*

CAMPAGNOLO, Gilles TAKAHASHI, Katsuya (translation)

### 序論

人間たちの下位の諸欲求から始まった私の学問形成において、私は必然的に学そのものへと駆り立てられることになりました。そうして私の若き日の理想はある形の反省となり、同時に一つの体系へと姿を変えねばなりません。では人々の生活への関与に立ち返るため、どんな手立てを見出したものでしょうか。<sup>1</sup>

1800年以降ヘーゲルは、最初の体系と言うべきものをもっていると主張するようになる。ということは、そこから彼の反省が始まったあの、生への本来のなしっかりとしたつながりが再び見いだされねばならないわけであり、物質的生活という「人間のこうした下位の諸欲求」へのつながりが再び見いだされねばならないわけである。経済的に根を下ろすというこのことは、「人々の生活への関与」に立ち返るという、思弁自身が求めているものを可能にしてくれるはずである。だが、この物質的生活をどう思考すべきだろうか。というのも、思考が生へ立ち返るというのなら、生が思考

を基礎づけるのではなく、むしろ思考が自らを基礎づけつつ生を思考し、真に生きた生、すなわち思考する生を基礎づけるわけであろうから。思考はしたがって、自らを維持し、自らを感じはするが、自らを知ってはいない、そういう生というものの中に、思考されない間は真にその諸要素となりえないような諸要素を見出さねばならないのである。

裏返して言えば、思考はまだ思考ではないものを把握する。思考されるものがないなら思考もないのである。それだから、思弁は、人間の経済的生活を考えようとして、体系のただ中で学の実証性というものを見出すことになるのだ。思弁は自分自身のうちに「自然」法則という実証的契機を書き込む（天文学と同じように。ヘーゲルは『法の哲学綱要』§189で、生まれつつあった経済学を讃える際、天文学を引き合いに出している）。他方では、思弁は消費し生産する「経済的行為者たち」を省<sup>エコノミー</sup>略することなく、人々が生きている生を思考する。そして、こうした経済的行為者たちに近代はそれらに固有の人倫的（sittlich）主体性を帰属させるのである。

アリストテレスの都市<sup>ポリス</sup>国家やフィヒテの『閉鎖商業国家』に対して近代的な人倫性を対置することで、ヘーゲルはマルクスへの土壌を準備することになるが、しかしまた、彼はイギリスの学問か

\* じる・かんぱによろ

フランス国立科学研究センター主任研究員

\*\* たかはし・かつや

埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授

らも、当時支配的だった〔重商主義的なドイツの〕官房学（Kameralwissenschaften）からも（思弁的な）距離を置くことを知っている。学と体系との種々のつながり（われわれは別のところでこれを研究した<sup>2)</sup>）は、それだから、人間の生活そのものにヘーゲルが注意を向けていたことを含意しているのである。この経済的生活に関する彼の最初の経験のひとつは、『ベルン・アルプス紀行』にまでさかのぼる。まずはこのテキストからその経験を浮かび上がらせてみよう。フランクフルト時代、イエナ時代、ベルリン時代に書かれたテキストはもっとよく知られているが、それらをその後に見ることにする。

『ベルン・アルプス紀行』の経験：いかなる弁神論も人間の厳しい物質的生活の観察に抗弁することはできない

ベルンで一介の家庭教師として生計を立てていたヘーゲルは、1796年7月25日から31日まで、近くのアルプス地方へ小旅行した。しかるに、その雄大な混沌を前にして彼は冷淡であった。「グリンデルヴァルトの二つの有名な氷河」を見て、こう書き留めている。「これらの眺めには何ら興味深いところがない。これを、精神に何も新しい活動をもたらさない一つの新種の見もの、と呼んでよかろう」<sup>3)</sup>。

この容赦ない判断は、人々が見には行くけれども概念把握しない、そういう対象としての自然を前にしたときの彼の反応を端的に要約している（他方、自然哲学が体系において十分に重要であることは言うまでもない）。ここでヘーゲルが容赦なくばっさり切り捨てているのは、始まって間もないツーリズム現象であるが、同時にまた、パウムガルテンや『美と崇高の感情性に関する観察』のカントが行ったような、美学化する分析も切り

捨てられているのである。

しかしながら、こうした退屈なピクニックの最中でも、彼の注意は人々の生活によって呼び覚まされていたのであった。まばらな地衣類やリンドウが生えているだけの荒涼とした地帯に至って、彼は書き留めている。

一つの家族が、リンドウ水を取るためにリンドウの根を採取して燃やしていた。この家族は夏場、人里から完全に離れて暮らしている。彼らは、自然が意図せずして積み重ね、塔のようになった花崗岩のブロックの下に、蒸留場を構築した。この偶然できたスペースを利用することを人間たちは知っていたということだ。最も信仰篤い神学者でさえ、この山中の自然は人間の役に立つよう目的性をもって作られているのだ、などと言う気になるだろうか。私には疑問である。

みすばらしい所帯の描写は、居住者のはかなく滅びそうな様子を強く意識して進められている。「手作りの粗末な品々、貧しい掘っ立て小屋、そして家畜小屋、これらが一晩のうちに破壊されてしまわぬという保証はどこにもない。」

以上の指摘の内に、あらゆる経済研究に先立ってヘーゲルが把持し、捨て去ることのない二つのテーマを見てとることができる。

1) 自然は人間のために作られたのではない。人間はけちんぼうな自然からおのれの存続の糧を無理にでももぎ取らねばならず、「この自然からささやかでわずかの有効利用を盗み取らねばならない」。

2) 生き延びるための戦いが十八世紀ヨーロッパの真ん中においてもなお存在している。発展が必要であることは明らかであり、野生時代への夢想はおめでたすぎる。ヘーゲルは後年の『法の哲学

綱要』(§ 194 の補論)においてもなおこの点に注意をうながし、それと同時に、新たに生まれた経済学を讃えている。

人々の生活の厳しさはこの哲学者を憤らせるが、わけでも、財の価値(および値段)と自然の吝嗇さに関する新しい問いかけが彼の中で膨れ上がってゆく。一つの単純な出会い(「ある牛飼いがわれわれにクリームを飲ませてくれた。・・・そして彼は、われわれに好きな額だけ払う自由を与えてくれた」)がすでに、(一見)経済循環の外にある財について、その値段を決定するものは何かと問うきっかけとなっている。それは「諸法則」に従うのだろうか、それとも偶然によるのだろうか。ヘーゲルは一つの実験を提案する。「この牛飼いたちは彼らの商品の価値より多くのものを受け取りたいと思っている。{もしも}彼らの見積もるところより少なくしか{払わ}ないなら、彼らは間違いなく不決定の態度を捨て、きっと値段分を要求してくるものと考えてよからう。」だがどういう値段だろうか。「{牛飼いたちが}見積もる値段」は、それだけで孤立した反省の産物ではない。散策者には隠れて見えないかもしれないが、その値段には、あらかじめ確立されている経済関係の網の目に属しているということが暗に含まれているのである。

一世紀の後、経済学者フランソワ・シミアンは同じような逸話を報告している。「山の中である牧人が旅人に一杯のミルクをふるまったのだが、牧人はいくら払わせたらよいのか分からないので、これが町だったらいくら取られたか、と旅人に聞いた」という話だ<sup>4</sup>。ヘーゲルの出会った小狡い牛飼いかも、シミアンの「無知な」牧人も、値段というものは「山の中」であってさえ抽象的な仕方では決定されるのではないということを知っている。彼らの取り引きは、「欲求の体系」全体から独立してしまうほどに他の人々の取り引きから切り離されているわけではない。この契機は、「経済的」世

界における生産者としての彼らの意識を特徴づけるものである。

ヘーゲルの二つめの論点、つまり自然のはなはだしい吝嗇ぶりを指摘する論点であるが、これは「神慮による」豊饒という考えを支持する「前科学的」経済学と手を切るものである<sup>5</sup>。弁神論に由来するこの思想をひっくり返すことは、古典経済学の核心をなしている。リカードが地代を説明するとき必ず地代に異議を唱えていることを思い起こそう。実際、リカードは驚きをもってこう述べているのだ。

土地は地代の形態で剰余を生むのだから、それは有用生産物の他のあらゆる源泉よりも利点をもっている、ということを知るのは、ごくありふれたことである。それにもかかわらず、土地は最も豊富、最も生産的、そして最も肥沃な場合には、地代を生まないのだ。・・・欠点と認められたはずの土地のこの性質が、その特有の卓越をなすものと指摘されねばならなかったのは、奇妙なことである<sup>6</sup>。

ヘーゲルはこのパラドクスを見て取っていたのであり、同じような思考の逆転を行っていたのである。誤謬ゆえに、骨の折れる山の生活というのがどれほど無理解を強いられることになったか、たとえば、「愛想のよい」自然を気前良いと讃えているアルブレヒト・フォン・ハラーの『アルプス』(ベルン、1732年)などにおいてそうになっているかを、彼はしっかり見て取ったのだ。誤りだ、と彼は言う。人々の生活はむしろ、牧歌的世界観と神慮への信頼を退けないではいられなくする、と。

十八世紀のヨーロッパは産業革命と政治革命を開始しているというのに、生き延びるための戦いは昔と変わっていないように見える。このことの観察を前にしては、いかなる弁神論も抗弁するこ

とはできまい。もしも豊饒の世界があるとすれば、それは自然の中ではなく、近代的生産の世界の中であり、そこでは山地の人々のつましとは反対に、町に密集する人たちの抑制なき消費が支配しているのである。ライン世界の商業・銀行の中心地フランクフルトから始めて、近代化しつつあるプロイセン国家の首都ベルリンに至る間、ヘーゲルはそのことを経験することになる。彼の経済研究は、近代の生産者となった人々の生活を再発見しようという関心に応えるものとなるはずだ。

### フランクフルトのヘーゲル：人間の経済活動を考慮せずに近代性の学はありえない

貴族階級の支配する山地ベルンを離れ、生存維持の経済を離れて、ヘーゲルはきわめて活発な経済生活の地へと赴く。「今度は、ベルンの家長制にもとづく門閥的な貴族社会から、商業的な貨幣貴族階級（Geldaristokratie）の都市へ来た」、というわけだ<sup>7</sup>。短いとはいえ、ベルン日記はヘーゲルが経済に関心を持っていたことを示していた（経済にまつわる種々の必要性は、家庭教師をやっていた彼が個人的にもよく理解していたところである）。そしてベルンの後に書かれるさまざまなテキストは、近代性において政治経済学が決定的な性格をもつことを強調するだろう。そうしたテキストの源泉となるものとして彼が何を読んでいたかは、分かっている。代表的なものはジェームズ・スチュアート『経済学の原理』とアダム・スミス『諸国民の富』（ガルヴェによるその翻訳をヘーゲルはイェナ時代に読むであろう）である<sup>8</sup>。ベルリンで教授を務める時代に至るまで、彼は同時代の経済学者たちの仕事を繙き続けるだろう。ベルリン時代の『法の哲学綱要』ではスミス、リカード、セイが引用されている。ちなみに、『法の哲学綱要』の刊行はリカードの『経済学および課税の原理』

第3版（機械についての有名な章が盛り込まれている）刊行と同じ年である。

他の哲学者たちも経済に強い関心を寄せはてはいる。しかし、『自然法の基礎』という自己の体系からの純粋な演繹として『閉鎖商業国家』（1800）を書いたフィヒテの自給自足経済の思想とは対照的に、また後に実証的な仕事をなして「ブルジョア的」「ドイツ・イデオロギー」の告発をはかるであろうマルクスとも異なっており、ヘーゲルは人間の物質的生活を考えるために交易の自由を体系のうちに組み入れるのである。フィヒテ流の「正義は行われよ、たとえ世界は滅ぶとも」という性質の悪い路線には与せず、また近代性に対するよくある輕蔑的態度にも抗って、彼はゲーテがすでに注目していた活気ある商業的生活に目を輝かすのだ。

私【ゲーテ】の生まれた市は・・・十分考慮されてはいないが、一つのまったく独自の状況を示していた。・・・フランクフルト・アム・マインにおいては、商業、資本財、家屋や土地の所有、知識欲、収集欲がからまり合っているように思える複雑な様相が見られた<sup>9</sup>。

ラインとモーゼルのワインが売り買いされ、大地の恵みから織物工場まで取り引きするこの河岸の町では、年に二回、市が催され、提供される財の豊富さで人の目を驚かすのだった。ヘーゲルはそこで商業資本主義を間近に見、それに参加しさえする<sup>10</sup>。

だが、こう言ったからとて、この哲学者が体験する危機を見ないことになってはいけぬ。フランクフルトでは「若きヘーゲルから人間ヘーゲルへの移行」が起こった、とベルナル・ブルジョワが強調しているとおりである<sup>11</sup>。ベルンではヘーゲルは、古代的全体性の理想のもつ統一性と、カント的キリストの宗教的自律性とを表現しようと

模索していたが、経済的近代性の光景を目の当たりにしてそれが終わりを告げたのだ<sup>12</sup>。愛の内の中のみにあって愛の内でのみ把握される生きた全一、その真理は宗教にほかならないところの生きた全一を語ることは、当時単に悟性と同一視されていた「反省」には不可能であったのだが、この障害が克服されねばならない。こうして、フランクフルト危機の中で「ヘーゲル主義そのものの練り上げ」(B.ブルジョワ)が進行してゆくのである。

さて、件の神学的省察のうちに、人間の経済的生活というテーマが一貫して現前しているのを読み取ることができよう。自然の敵対性はひとつの苦悩である。曰く、「ノアの洪水が人々の心に与えた印象は、それを深く引き裂くような印象であり、その結果は自然に対する途方もない不信であるほかなかった、・・・自然はあらゆるものの上に破壊の暴威をほしいままにした。」<sup>13</sup>自然はたった二人の生存者の必要を満たすことさえつらいものにした。「ノアはそれ【自然の敵意ある力】と自己自身とを一つのより力ある者のもとにゆだねることによって自己を安固にしたが、ニムロデはみずからそれを制御することによって自己を安固にした。両者は敵と一種のやむをえざる和睦を結んだが、そうすることによって敵対関係を永遠化した。」<sup>14</sup>箱舟に収容されるか狩り獲られるかした動物たちが、とりあえずのあいだ人間が生き延びることを保証してくれたけれども、アブラハムに存続を確約してくれたのは結局農耕である。「水は井底深く憩い、いささかの動きもしなかった、それはみずから労苦して掘ったものである。高価な犠牲を払ってあがなったか戦いとったものである。それはやむをえず手に入れた所有物、彼と彼の家畜にとって緊急の必要物にすぎなかった。」[ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』邦訳 7-8 頁。Werke 1, S.278.] おそろべき神に従属していた旧約聖書のオリエントにあっては、人は風土の専横にただ服

従していた。貧しい自然、強烈で無気力にする暑さが、質素な経済体制と専制政治の中でようやく生きのびるというあり方を条件づけているのである(モンテスキューの見方とは違って、決定づけるところまではいかないにしても)。ヘーゲルもマルクスも、ヨーロッパの経済的成長の諸段階を分析する一方、「アジア的」生産様式を通時的に分析することをしないが、それも以上のような理由からなのである。

ギリシア人とはいうと、私有財産を規則で定めると同時に、それを制限し、最初の生産的都市国家を組織した。「ソロンとリュクルゴスは、富の不平等が自由を脅かすという危険から彼らの国家を守っておくために、所有権をさまざまな仕方で制限した。・・・ギリシア人たちが平等たるべしとされたのは、すべての者が自由であり自立的であったからであり、ユダヤ人たちが平等たるべしとされたのは、すべての者が自立の能力をもっていなかったからである。」<sup>15</sup>しかしながら、自由の理想は、現実的なものとなるためにこうした全体性を破棄せねばならなかった。ひとたび近代が開かれるや、アテネに戻ることはできないし、神慮に導かれるキリスト教になおとどまるということもできない。「正確に言えば、フランクフルトでヘーゲルは、近代世界を古代世界に戻すことの不可能性を自覚したのだ。・・・近代の人間にとって問題は、(ギリシア人のそれに比しうるような) こうした美と神性とを、今の世界の取り消すことのできない諸条件の中で創造することなのだ。」<sup>16</sup>

諸々の欲求を満たす上で不可避である相互依存の関係が、以後、人間の生活を方向づけることになる。さて、この経済的生活は思考されうるものである。つまり、「物 (Ding)」の物質性に自己意識が対峙することによって「<sup>キョルチュール</sup>育成 (Bildung)」が始まるが、経済的生活とはこの育成による財の生産であり、かつ、人間たちの自己生産なのであ

る。『精神現象学』から最後の著述である『英国選挙法改革法案』（そこでの社会・経済学的論評は、イギリスの選挙制度における支配関係の変化一切を前にして示されたこの哲学者の賢明を裏書きしてくれる）に至るまで、ヘーゲルはこのように体系的に、経済学的諸問題を人間たちの実際の活動に関係づけ、彼らの物質的生活の把握を彼らの近代人としての自由の発現に関係づけ、そして理性的かつ現実的なものへの同意をその現実化のための諸条件に関係づけてゆくのである。

**結論。フランクフルト後のヘーゲル、イエナからベルリンへ：今や客観的精神が、それ自身学として認められるような人間の物質的生活の研究を明白なものにする。**

フランクフルトでの生まれかけのヘーゲル主義において実証的に扱われていた諸々のテーマについて言えば、それらも同様に最終的なヘーゲル主義の中で具体的に捉え返される、つまり、絶対者の過程の諸契機として位置づけられる……。所有という事実、およびその発展である市民的・ブルジョワ的社会という事実、それ固有の水準においては乗り越えることのできないひとつの契機として、すなわち経済的生活という契機として、正当性を与えられるのである<sup>17</sup>。

イエナからベルリンにかけて、われらが「教授の中の教授」は、シェリング宛手紙で言及されていた「人間の下位の諸欲求」についていよいよ練られた形で論じ、市民社会についての彼の概念は「欲求の体系」へと行き着く。「司法活動」や「福祉行政と職業団体」などの概念によって、ヘーゲルは近代の経済的生活の完全な概念化を精神の弁証法的歩みの中に造形するが、この作業は、主体が家

族と国家にのみ関係するという伝統的な考えを否定しつつ、スコットランド啓蒙の諸思想に何ら遜色ない仕方で行われている<sup>18</sup>。彼は自分の考えをファーガソン、スチュアートの市民社会（civil society）と混同しはせず、スミスの文明社会（civilized society）と混同することもない。なぜなら、伝統的束縛から脱した近代の消費者・生産者が自分だけで自分の諸欲求を決定するのであるとすれば、これに対して、強制と悟性の統べる「外面的国家」[ヘーゲルの言う「市民社会」のこと]は「もろもろの主観的目的や道徳的意見をもった悟性がおのれの不満と道徳的腹立ちを洩らす分野」でもあるのであり<sup>19</sup>、そのためそこでは、生産者たちの生活の自律的領域を是認し、乗り越えかつ保存する（止揚する *aufheben*）ところの、国家による「行政的管理」が必要となるのであるから。

近代性の理性的かつ現実的なものに対してヘーゲルが与える同意、それはギリシアの「美しい全体性」へのノスタルジーを帯びていないではないが、決定的であり、後戻りの余地はない。このため、ヘーゲルは、ドイツに急速に普及していた古典経済学を読んだとはいえ、彼の亜流たちがマルクスによって非難されるゆえんとなったブルジョワ的生活の「イデオロギー」へ導かれることはなく、むしろ、供給と需要が市場に及ぼす諸力の過剰に本質的に属しているあの貧困と富裕の弁証法を示して見せることへ向かうのであり、他方では、そうした過剰な力を抑制するために生まれた諸々の規範的上層部門に注意を向けさせることへ向かうのである。欲求の満足と人倫的人格の無限のフォルマシオン教養形成（Bildung）は、そこでは市場の自然発生的秩序と、行政、政府、君主の賢明な介入とによって条件づけられているのだ。

## 訳者付記

本論文は、Gilles Campagnolo, « Penser la vie matérielle des hommes – le jeune Hegel et les producteurs modernes », in *Hegel Jahrbuch 2006 : Das Leben Denken, Erster Teil*, hrsg. von Andreas Arndt, Paul Cruysberghs, Andrzej Przyłębski in Verbindung mit Franck Fischbach, Berlin, Akademie Verlag, 2006 の翻訳である。本文および注の中の ( ), { } に括られた部分は著者カンパニョロによる挿入であり、[ ] で括られた部分は訳者による挿入である。

原著論文の収録されている『ヘーゲル年報 2006 生を考える 第一部』は、2004 年にフランスのトゥールーズで開催された第 25 回国際ヘーゲル学会 (Der XXV. Internationale Hegel-Kongreß) で行われた研究発表を収録したもので、『ヘーゲル年報 2007 生を考える 第二部』とセットで刊行されている。また、2015 年 1 月 20 日、埼玉大学教養学部でのセミナー「人間と経済をまじめに考える―若きヘーゲルと近代の生産者たち」において、この原著論文と同じ内容の報告がカンパニョロ氏によって行われた。その縁で、この論文をここに訳出するに至った次第である。論文の翻訳と本紀要への掲載を快く許可してくれた Walter de Gruyter 社 (Akademie Verlag) と著者のカンパニョロ氏に心より感謝申し上げる。

著者のジル・カンパニョロ氏はパリ高等師範学校にて哲学と経済学を専攻。ハーバード大学、東京大学に留学した後、パリ第一大学で博士号取得 (2001 年)。2002 年から現在まで、フランス国立科学研究センター主任研究員。2008 年以降、国際日本文化研究センター (京都)、北海道大学などで客員共同研究員を務める。主著に *Critique de l'économie politique classique. Marx, Menger et l'École historique*, Paris, Presses Universitaires de France, 2004, Paris, Editions Matériologiques,

2014 (réédition). *Carl Menger, entre Aristote et Hayek : Aux sources de l'économie moderne*. Paris, CNRS Éditions, 2008 など。編著に *Liberalism and Chinese Economic Development : Perspectives from Europe and Asia*, London & New York, Routledge, 2016 など多数。

<sup>1</sup> G.W.F. Hegel, Lettre à Schelling, 02/11/1800, *Correspondance*, tr. Carrière, Paris, 1962 (rééd.), I, p.60. [Briefe von und an Hegel, Band 1: 1785-1812, hrsg. von Johannes Hoffmeister, Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1952, SS.59-61. ヘーゲル、「シェリングへの手紙」、1800 年 11 月 2 日。]

<sup>2</sup> Gilles CAMPAGNOLO, « Hegel et l'économie politique: la science et le système », in *Wirtschaft und Wirtschaftstheorien in Rechtsgeschichte und Philosophie*, éd. Mohnhaupt & J.-F. Kervégan, Frankfurt/M., 2004, pp.109-128.

<sup>3</sup> G.W.F. Hegel, *Journal d'un voyage à travers les Alpes bernoises*, tr. Legros, Grenoble, 1988, pp.56-57. 次に続く引用は、同書 p.76 以下。下線による強調はわれわれによるもの。[ヘーゲル『アルプス紀行』。] »Auszüge aus dem Tagebuch der Reise in die Berner Oberalpen«, in G.W.F. Hegel, *Werke 1, Frühe Schriften*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, dritte Aufl., 1994, S.614, S.617.]

<sup>4</sup> Maurice Halbwachs, *La mémoire collective*, Paris, 1950, p.155.

<sup>5</sup> 「農業は神の設けたもうた製造業であり、そこで製造者は、自然の<創造者>、すべての財およびすべての富の<生産者>御自身と提携している。」(ミラボー『田園哲学』。Michel Foucault, *Les mots et les choses*, Paris, 1966, p.218. [ミシェル・フーコー『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974 年、216 頁] より孫引き)。

<sup>6</sup> David Ricardo, *Principes de l'économie politique et de l'impôt*, tr., Soudan, Paris, 1992, pp.96-97. [リカードウ『経済学および課税の原理』、羽鳥卓也・古澤芳樹訳、岩波文庫、上、112 頁。] 地代は、肥沃で自由に使える土地が無制限にあるわけではないということから生まれてくる。質の劣った土地を耕す場合、同じ生産物を得るのにより多くの労働を必要とする。このことが、もっとよい土地と比べた場合の利点を引きだすのであり、それゆえ土地を求め、地代を払う用意のある小作農たちの競争を生み出すのである。

<sup>7</sup> Karl Rosenkranz, *Hegels Leben*, Berlin, 1844, S.85. [ローゼンクランツ『ヘーゲル伝』、中塾肇訳、みすず書房、1983 年、95 頁。]

<sup>8</sup> スチュアート著作に関するヘーゲルのノートは失われたとローゼンクランツは述べているが、つながりをうかがい知ることではできる。以下を参照。Paul CHAMLEY, *Économie politique et philosophie chez Stuart et Hegel*, Paris, 1963 ; CAMPAGNOLO, « Hegel et l'économie ». [カンパニョロ前掲論文。] 『諸国民の富』のガルヴェ訳 (ブ

レスラウ/ライプツィヒ、1794-1796年)以外にもヘーゲルが多く、経済学上の著作を持っていたことをゼーベックのカタログ(1832年)は教えている、とジャン＝フランソワ・ケルヴェガンは報告している。Hegel, *Principes de la philosophie du droit*, tr. J.-F. KERVÉGAN, Paris 2003, p.286 [ヘーゲル『法の哲学綱要』のケルヴェガンによる仏訳]を参照。

- <sup>9</sup> G.W. GOETHE, *De ma vie. Poésie et vérité*, tr. du Colombier, Paris, 1941, pp.455-456. [ゲーテ『詩と真実わが生涯』、『ゲーテ全集 10』、河原忠彦・山崎章甫訳、潮出版社、1980年、259-260頁。]
- <sup>10</sup> 「ビジネスの」生活の中で「狼たちとともに吠える」のも悪くない、と彼は心に思った。また、聖アレクシスのお祭り騒ぎを楽しみもした。Lettre à Nanette Endel, 09/02/1797, *Correspondance*, I, p.52 [1797年2月9日のナネッテ・エンデル宛の手紙]を参照。だが、それにもかかわらず、『人倫の体系』から最後のベルリン時代の諸著作に至るまで、)反復的作業が労働者たちにもたらす愚鈍化の作用や、起業の自由の不完全性を彼は告発し続けるだろう。
- <sup>11</sup> Bernard BOURGEOIS, *Hegel à Francfort. Judaïsme, christianisme, hégélianisme*, Paris, 1970, p.30 sq.
- <sup>12</sup> G.W.F. Hegel, Lettre à Schelling, fin janvier 1795, *Correspondance*, I, 21-23. [1795年1月末のシェリング宛手紙。]
- <sup>13</sup> Hegel, *L'esprit du christianisme et son destin*, tr. Martin, Paris, 1988, rééd., p.3. [Hegel, *Der Geist des Christentums und sein Schicksal*, in *Werke* 1, Suhrkamp, SS.274-275. ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』、木村毅訳、現代思潮社、1969/1991年、2-3頁。]
- <sup>14</sup> Ibid., pp.16-17. [*Werke* 1, S.276. 邦訳 5頁。]
- <sup>15</sup> Ibid. p.5. [*Werke*, I, SS.289-290. 邦訳、25-26頁。]
- <sup>16</sup> BOURGEOIS, *Hegel à Francfort*, p.86.
- <sup>17</sup> Ibid. p.121.
- <sup>18</sup> Norbert Waszek, *The Scottish Enlightenment and Hegel's Account of "Civil Society"*, Dordrecht, 1988.
- <sup>19</sup> Hegel, *Principes*, tr. Kervégan, § 189, P.286. [ヘーゲル『法の哲学綱要』 § 189。]